

G・セデス著

『インドシナ半島の人々

——歴史・文明』

G. Coëdès, *Les peuples de la péninsule indochinoise: histoire—civilisation*, Collection SIGMA, Paris, Dunod éditeur, 1962, 228 p.

I

東南アジア地域が歴史上にもつ重要な意義は何かといえば、それは何よりもまずこの地域が東アジアと南アジアの中間地帯に位置し、したがってまた同時に、この地域がアジアにおけるインドとシナ(中国)という二大文化圏の接触・交錯する過渡地帯としての役割を担った点に求められよう。この点において、とくに東南アジア大陸部を指す「インドシナ」(Indochine) という称呼は当該地域のもつこうした中間地帯としての性格を最も象徴的に示しているといえよう。

世界の屋根といわれるパミール高原から発するコンロン、ヒマラヤの両山脈が合するチベットの東部から東南に向かう山系は、扇状に開いてインドシナ半島に幾条かの山脈を分岐させ、これらの山脈の間を流れるイラワジ(Irawadi), サルウィン(Salwin), メナム(Ménam), メコン(Mékong), 紅河(Fleuve Rouge)の諸河川はそれぞれの流域に歴史上多数の種族の主要活動舞台となった肥沃な平野を展開している。こうしたインドシナ半島には、現在、南・北ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマといった国々が独立国家として存在している。ここに紹介せんとするG・セデス氏の『インドシナ半島の人々——歴史・文明』は、まさにこのインドシナ半島地域の歴史研究をその主要課題としているのである。

この地域諸国の住民はオーストロ・アジア系のモン・クメール語族、南シナ系のベトナム民族、チベット・ビルマ系のビルマ民族、西南シナ系のタイ族とおのおの異なり、またそれらの文明も非常に異なる側面をもつが、そこにはなお「多様性の中の統一」ともいえる共通要素が基底に存在している。これに対して、インドネシア(Indonésie)はインドシナ半島諸国間においてみられたほどインドシナとの歴史的関係が重要でなく、またイスラム(Islam)教という大きなインパクトを受け、ヨーロッパ勢力の到来や、その植民地化が大陸部よりも早かつ

た点で、一応この場合の主要対象地域から除外し、またこのインドネシアと地理的、歴史的にも緊密なマレー半島地域も同様にさしあたっての研究対象地域からはずすこととされている。

著者自身の言葉によれば、本書は当初、インドシナ半島諸国について、歴史上の諸事件の年代記に評論的なコメントを付して、それを論理的に並べたいわゆる一般史を、専門家に対してよりもむしろ一般読者のために提供する意図のもとに執筆されたものである。しかし、このような意図にもかかわらず、研究段階のおくれや十分な史料に欠けるために、結果的にはインドシナ諸国の文化の各側面のすべてについて明瞭に描写することはできなかった。しかし、少なくともこの地域諸国の文化が興起し、発展し、そして衰亡した環境についての簡単な様相だけは提示しえたものと著者は見なしている。

このような著者自身による控えめな評価にかかわらず、客観的にみれば、本書はやはり世界の東南アジア史学界の現段階において望みうる最近最高の成果の一つだといわざるをえないと思う。19世紀以来、フランス学者やオランダ学者を中心に推進されてきた東南アジア史研究も、当該地域における小地域ごとの文化パターン、言語などの相違や複雑性、史料の制約といった障害的諸条件のためにその研究の進展も容易ではなく、これまでのところでは年代記的な各国史はともかくとして、東南アジア史としてまとまった全体像を一般読者に提供することは不可能に近い状況にあった。一貫した見通しのもとにこの地域全体の歴史を総合的に提示しうる学者を強いて挙げるとすれば、やはりまず第1に本書の著者であるフランスの碩学G・セデス氏の名を挙げることに何人も異論はないであろう。事実、第2次大戦後になって以来、これまでにインドシナ史ないし東南アジア史として、André Masson, *Histoire de l'Indochine* (Que sais-je? No. 398, Paris, 1950), Brian Harrison, *South-East Asia: A Short History* (London, 1955, 2nd ed.; 1963), D. G. E. Hall, *History of South-East Asia* (London, 1955, 2nd ed.; 1964), Lê Thành Khôi, *Histoire de l'Asie du Sud-Est* (Que sais-je? No. 804, Paris, 1959), J. F. Cady, *Southeast Asia: Its Historical Development* (New York, 1964), N. Tarling, *A Concise History of Southeast Asia* (New York & London, 1966)などが出たが、それらはいずれも、とくに1511年のポルトガル勢力によるマラッカ占領以前の時期については、みな一様にセデス氏の名著 *Les états hindouisés d'Indo-*

chine et d'Indonésie (『インドシナおよびインドネシアのインド化された諸国家』(Paris, 1948, rev. ed.; 1964)にその多くを依拠しているのである。

本書はこうした斯界の最高權威たるセデス氏によってその多年の研究の成果を基礎に、インドシナ地域の歴史を総合的に開陳せられたものであり、その所論はいずれも読者を十分信頼させるに足るものとなっている。

II

セデス氏は1886年パリ生まれの本年82歳、フランス東洋学界の最長老であり、これまで元ハノイにあった(現在はパリ)フランス極東学院(École Française d'Extrême-Orient)を足場に、35年に及ぶ現地体験をもち、多年にわたって東南アジア史、とくに碑銘学的研究によるインドシナの歴史研究に多大の貢献をなしてきた。

かれはソルボンヌ高等研究実習学校(École Pratique des Hautes Etudes)で学んだが、早くから興味をもっていたインドシナの歴史研究に関する処女論文“*Inscription de Bhavavarman II, Roi du Cambodge (561 çaka)*”を1904年に『フランス極東学院学报』(*Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*=BEFEO)に表発して学界に登場している。時に18歳であった。かれの非凡さがうかがわれる。

1911年にハノイのフランス極東学院の委託生となり、ついで1914年から同学院教授となり、カンボジアを中心にインドシナの碑銘の研究にいっそうの磨きをかけた。1917年から1928年までタイ国(シャム)に派遣されたが、この間バンコックの国立ヴァジラニャーナ(Vajrañāna)図書館館長、王立研究所(Institut Royal)所長、シャム協会(The Siam Society)会長などを勤めると同時に、*Recueil des Inscriptions du Siam* (2vols, Bangkok, 1924, 1929)をはじめとして、ドゥヴァーラヴァティ(Dvāravatī)国やスコタイ(Sukhothai)王朝、アユチア(Ayuthia)王朝など、タイの古代史に関する幾多のすぐれた業績を生みだしている。のみならず1918年には、スマトラを中心に7世紀から興起したシュリーヴィジャヤ(Çrivijaya)王国の存在と政治的重要性をはじめて明確に論証した名篇を発表してもいる。

ついでハノイに帰り、1929年から1946年まで極東学院院長という重責に任じ、第2次世界大戦前後の悪条件のもとにありながら伝統ある同学院の研究事業の推進に当たった。この間自らも積極的に研究活動を続け、次々に名篇を発表しており、ついに1944年に多年の研究成果に

基づいてこれを総合した著書 *Histoire ancienne des états hindouisés d'Extrême-Orient* (Hanoi, 1944)を発表するに至っている。この書の改訂版が先に紹介した *Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie* であった。

本国に帰ったかれは1946年からパリのエヌリー博物館長となり、また後に国立東洋現代語学校(École Nationale des Langues Orientales Vivantes)でタイ語、インドシナ史を講じた。最近でもセデス氏の研究活動は依然衰えず、本書のような総合的論説や多くの精緻な考証論文を次々に発表しつつある。そしてカンボジア史の根本史料研究の集成である“*Etudes Cambodgiennes 1-40,*” BEFEO, Vol. 11-48 (1911-54)や *Inscriptions du Cambodge*, 8vols. (Hanoi & Paris, 1937-66)を完成させている。なおかれの膨大な著作のうち1961年までに発表のものについての年次別目録が *Artibus Asiae*, Vol. XXIV, No. 3-4 (セデス75歳記念特別号)、1961に掲載されている。

現在、セデス氏は極東学院名誉院長に推戴されており、同時にフランス学士院、イギリス学士院のメンバーという学界の栄位に就いている。

III

本書の構成はつぎのごとくである。

序論 (pp. 1~6)

第1部 インドシナにおける人類の居住 (pp. 7~40)

I. 地理的範囲

II. 先史

第2部 インドシナにおける国家の形成 (pp. 41~74)

I. 中国による紅河デルタの征服とベトナム国家の形成

II. インドシナにおけるインド文化の導入

III. 半島におけるインド文化の発展

1. 南部における発展: フーナン (Fou-nan)

2. 半島東部におけるインド文化の発展: チャンパ (Champa)

3. 半島中央部および西部におけるインド文化の発展: シュリークセトラ (Çriksetra) とドゥヴァーラヴァティ (Dvāravatī)

第3部 6世紀から13世紀のインドシナ諸国家 (pp. 75~115)

I. ベトナム (Viêt-nam)

II. カンボジア (Cambodge)

III. ビルマ (Birmanie).

第4部 13世紀の危機とインド文明の衰退 (pp. 117~129)

第5部 13世紀以降のインドシナ諸国家 (pp. 131~202)

I. シアム (Siam) またはタイ (Thaïlande)

II. ラオス (Laos)

III. ビルマ

IV. カンボジア

V. ベトナム

結論 (pp. 203~214)

固有名詞索引 (pp. 215~228)

セデス氏の記述は詳細に多方面にわたって述べられており、それを正確に、しかも簡単に紹介することは困難であるが、以下主要な点についてのみ若干触れることとする。

何といても本書で取り扱われる主要なテーマはセデス氏の最も得意とする「インド化」(Indianisation)の問題を含めて、このインドシナ地域諸国家における中国・インド両先進文化との接触およびその導入の問題であろう。

まず中国文化の導入すなわちシナ化 (Sinisation) について考えてみよう。中国文化がインドシナ半島の東北部 (現在の北ベトナム地域) に及んだのは西紀前3世紀に秦の始皇帝が南方の犀角、象牙、翡翠、珠璣を得んとして武力によってここを征服したことに端を発している。当時この地域にはすでにいまのベトナム人の祖先が居住していたが、多分この事件を契機として、かれらは中国文明に接することになったとみられる。間もなく秦は滅び、その後嶺南に興起了た趙佗の南越国は明らかにいまのベトナム北部に支配権を及ぼしたが、西紀前111年に漢の武帝がこれを伐ち、これを機に継続的に中国の政治的支配力がベトナム地域に及ぶに至った。

漢は中国人官吏を派遣してこの地域の統治に当たさせた。当時ベトナム人はまだきわめて未開の状態にあり、石鋤で耕作し、裸体で、身体に入墨をしていたが、中国統治下に編入されるとともに、中国の文字を学び、その道徳や宗教を取り入れた。しかしこの間、中国人官吏の施政は原住民の不満をかうことが多く、早くも後漢の光武帝時代 (西紀前40年) には、ハイ・パー・チュンという称呼で知られる徴側・徴式姉妹の反乱が起こった。

これに対して光武帝は將軍馬援を派遣してこれを討伐させた。この時以後、中国のベトナムに対する政治的直接的

支配はいっそう強化され、それは10世紀にベトナムが独立するまで1000年以上の長きにわたって続くのであり、この間中国文化は原住民たるベトナム人社会の中にしだいに深く浸透していったのである。この期間はいわば中国政治勢力圏と中国文化圏はほとんど一致していたといえるが、10世紀のベトナムの独立後は中国文化圏のみを残して中国の政治勢力圏そのものは本来の中国境域内に後退するところとなった。

かくして、儒教および道教によって代表される中国文化圏はベトナムを限度としてそれ以上南方に前進することはなかったのである (これに対して、インドの仏教は、中国を介してではあるが、ベトナムに伝えられたので、インド文化圏は中国文化圏の上をも被うこととなった)。

もっともこうしたベトナム民族は、同じくインドシナ半島東部でその南側に居住してインド文化の影響下にあったチャム (Cham) 族を制圧しながら (17世紀にはその国家チャンパを史上から消滅させた) 中国文化圏をしだいに南方に押し進めたという事実はこれを否定できない。その場合にも、その南端は現在の南ベトナム、コーチシナ地域までにとどまった。ベトナムのシナ化は意味こそ違え、独立後も続いており、19世紀初頭に成立した阮朝治下において最も徹底したとするセデス氏の指摘は正しいと考えられる。

このようにベトナム民族が主として中国文化の影響下にあったのに対して、他のインドシナの諸民族は、だいたい西暦1~2世紀のころから、その大部分がインド文化の刺激をうけて国家活動を行なうに至っている。

インド文化の伝播にはとくにインド移民の果たした役割が大きかった。当初は商人や冒険家の到来者が多かったが、この西暦1~2世紀ごろから学者や僧侶などインドの知識階級も多くインドシナに渡来し、学問・宗教のほか、インドの政治組織なども伝え、かれらの支配または指導のもとに、大小の「インド化」された国家が各地に誕生したのである。このように、インド化の場合には、前述したシナ化の場合と異なって政治的背景を伴わず、平和裡に推進された点にその特異性が見いだされる。なおここに「インド化」とは、セデス氏の説明するところを要約すれば、インド文化の1、2の要素がばらばらに伝達されるのではなくて、ヒンズー教 (シヴァク Śiva) あるいはヴィシュヌ (Visṇu) の崇拜) または仏教によって特色づけられた王権に関する思想をもち、プラーナ (Purāna) の神話を伝え、インドの法典 (Dharmaśāstra)

を遵奉し、サンスクリット (Sanskrite) 語を使用するといったような、有機的複合体としてのインド文化の伝播を意味している。

このような意味において、インドシナ半島におけるインド化された国家の主要なものを挙げると、国によって多少の時代の差はあるが、東側から数えて、まず半島東岸でベトナムに南接したチャンパ (Champa)、メコン下流域を中心とするフーナン (Fou-nan、ついで6世紀以降にはチェンラ (Tchen-la)、メナム下流域のドゥヴァーラヴァティ (Dvāravati)、イラワジ下流域のシェリークシェトラ (Çrikṣetra) ということになろう。これらのうち最も早く、西暦1世紀ごろから歴史に登場したのはフーナンであった。

ところが、これら諸国のインド化には、ある限界が認められた。すなわちたとえば、カースト制が移植されたが、これらインドシナ諸国ではブラーマン (brahmane) とともにクシャトリア (kṣatriya) が高い階級とされていた。またインドシナ諸国では村落の閉鎖的性格が濃厚であったため、インドからの移住者またはインド化した原地人エリートから構成される支配者による中央政府の統制力は、そうした村落内部にまでははいるにできなかったように思われる。また宗教についてみると、大乘仏教について、ヒンズー教が伝播し、シヴァやヴィシュヌなどの神が信仰され、ここにカンボジア (チェンラ) などでは国王を上記2神と一体のものとして崇拜するデーヴァラージャ (Devarāja、神王) として畏敬するようになったが、こうしたインド的宗教はあくまでも支配者階級のものたるにとどまっていたようである。この地域でインド的宗教の一般民衆への浸透は11世紀から14世紀にかけてパーリ語仏教 (小乗) がこの地域諸国に普及するまで待たねばならなかったのである。以上を要するに、平和裡にもたらされたインド的文化の影響下にあつては、政治的背景をもったシナ文化の場合よりもいっそう容易に原住民独自の文化要素を展開する余地が残されていたわけであった。インド的国家を形成したインドシナ諸国の文化相互間に、インド的文化の枠内でおのおの多くの差異が見いだされるのはこのためである。

IV

つぎに、セデス氏がこの地域の歴史上、そのインド的要素の衰退をもたらしたとしてとくに重視している13世紀について注目しながら、以後のインドシナ諸国史について一瞥しておくこととする。13世紀の変動は主として

モンゴル (元) 軍の南侵に関連したものであり、この13世紀後半の事件は、前世紀以来インドシナのインド的諸国に現われてきたインド的要素の衰退 (ないしは変化) を助長し、以後の東南アジア諸国家、民族の歴史展開の上に大きな影響を及ぼしたのであった。

たとえば元の世祖フビライは、その即位前、南宋征服の途次まず現在の雲南地方に拠っていた大理国を1253年に滅亡させたが、これはすでにインドシナ半島北部にいくつかの小王国を樹立していたタイ族のインドシナ中央部への南下・発展をいっそう促進させる重要な原因の一つになったと思われる。さらにモンゴル族の南侵は世祖の南宋征服後においていっそう大規模に行なわれた。それらは国別にみると、ビルマが1277年、1283～1287年、ベトナムが1284～1285年および1287～1288年、チャンパが1282～1284年、ジャワが1292～1293年となっている。

このうちビルマ侵略は約2世紀間ビルマに君臨したパガン (Pagan) 王朝を倒してタイ族系王朝をビルマに樹立させた。また一方同じタイ族はメナム河流域に南下してここを占領し、クメール族とモン族を東西に分断した。その最初は13世紀に興起したスコタイ (Sukhōt'ai) 王朝であるが、14世紀中葉 (1350年) から18世紀中葉まで続いたアユチア (Ayuthia) 王朝がこの事業を完成した。1767年、このアユチアはふたたびビルマで勢力を回復したビルマ族の国家アラウンパヤ (Alaungpaya) 王朝からの侵入によって灰燼に帰し、代わってタイには新しくバンコック王朝 (=チャクリイ王朝) が興るのである。なおタイ族と同種のラオ族によって、ランチャン (Lan Ch'ang) 王国が創建されたのもアユチア王朝と同じ14世紀中葉 (1353年) のことであった。

つぎにはベトナムおよびチャンパへのモンゴルの侵略は相関連しており、元の世祖は南海貿易を発展させるべく、交通路の要衝チャンパの征服を考え、それを海路攻撃したがいったん敗退し、その後陸路からふたたびチャンパに侵入しようとしてその通路に当たる北隣のベトナムを侵略したものであった。ベトナムとチャンパは平常敵国として対立しながらも、モンゴル軍の侵寇に際しては同盟し、共同してこの大敵に当たり、ついに独立を全うすることができたのであった。

以上のようなインドシナ諸国の状況の中で、カンボジア (チェンラ) だけはモンゴルの侵略を免れたが、この国も13世紀からしだいにその勢威は衰えた。これは従来その支配下にあったタイ族国家の独立とその伸長によって被害をうけたことを中心に、国内での政治的、文化的

体制に変化が生じたためであり、とくに14世紀にはいつてからその衰亡傾向はますます顕著なものとなった。そしてついに15世紀前半1431年には、タイからの攻撃によって、繁栄を続けたその首都アンコールを放棄せざるをえなくなり、以後のカンボジアはこの西隣タイに加えて、17世紀からは東隣ベトナムからも圧迫をうけ、時代が下るとともに国威も衰亡の一途をたどった。そして19世紀後半にはついにフランスの植民地支配下にはいり、ベトナム、ラオスとともに「仏領インドシナ」を形成することとなった。

なお18世紀中葉以来勢威を誇ったビルマのアラウンバヤ王朝も3次にわたるイギリスとの戦争（第1次1824～1826年、第2次1852年、第3次1885～1886年）によって滅び、ついにビルマも1886年以降イギリスの植民地となった。こうしてインドシナ諸国のうち、第2次世界大戦末まで名目的ながらも独立を全うしたのはわずかにタイ（シヤム）のみであった。なおこの間これらインドシナ諸国は、従来のシナ化、インド化に加えて、強く西欧化の影響をうけたことはいうまでもないが、セデス氏はインドシナ諸国の西欧植民地支配下にはいるまでその歴史叙述を終わっており、植民地支配下時代のインドシナ史については言及していない。

V

本書を一読してまず感ずることは、13世紀以後についての政治史的叙述がそれ以前の時代に関してよりもやや簡略で、生彩と迫力に欠けるように思われることであるが、これはやはり、東南アジアの初期インド化の問題を最も得意とする著者の性格からきていることだと思われる。もっとも、本書にみられる1511年以後のインドシナ史は前掲『インドシナおよびインドネシアのインド化された諸国家』に取り扱われなかったという点で、はじめて著者のこの時期のインドシナ史に関する総合的見解を開陳したものであり、その所論は注目されるが、これに関する氏の見解は相変わらず着実な実証研究に基づいて組み立てられており、妥当な結論が導かれている。なお13世紀以降の各国史の叙述の末尾には、美術と文学を中心にその国の文化について紹介し、その国内・外国のおおの要素が文化形成に果たした役割について概括している。

つぎに本書の叙述に当たったセデス氏のインドシナ史の把握のしかたについて一言したい。

セデス氏は本書においても、これまでの著作におけると同様、インドシナの歴史をその地域のインド文化あるいは中国文化といった外国文化の受容の歴史という観点を中心としてとらえている。このようにいわば受け身の歴史として東南アジア史を把握する方法は、この地域の歴史を全アジアあるいは全世界といった広い視点から把握しようとする点で確かにすぐれているといえる。とくに時代が下るにつれて世界史的展望を必要とする東南アジア史研究にとっては、こうした見方は不可欠となろう。

しかし一方、こうした視点に立って書かれた歴史はどうしても東南アジア社会における主体的な、内的な発展そのものを把握する面が弱くなる傾向をもつことは否定できないと思われる。

もとよりセデス氏はこうした側面の解明のためにインドシナ各国での社会経済史的研究の必要性を十分自覚しており、本書でもできるかぎりこうした問題についても留意・言及されているのであるが、なにぶんにもこれまでの東南アジア史学界における不十分な研究状況から、まだ社会経済史的側面からのまとまった見解を導き出すことは困難であるとし、これらに関する研究を今後の学界の課題として提出されているのである。したがって、こうした課題にこたえうる好研究が、今後セデス氏はもとより世界中の学者からどしどし生み出され、より正確な東南アジア史が書かれる日が一日も早く到来することを切望したい。

なお本書には H. M. Wright 氏訳による英訳本 *The Making of Southeast Asia* が1966年に University of California Press から出版されている。いま、これをフランス語原本と比較すると、本文は全く忠実な訳に終始しほとんど内容に変わりがないが、注の部分に若干差異がみられる。すなわちフランス原本で各章節ごとに付されていた注がまとめて全巻の末尾におかれ、またフランス語版出版後に出た関係文献がその注の中に追加されているなどの点である。

ともあれ、本書はインドシナについて研究する者にとってはもとよりのこと、東南アジアを正しく理解しようと努力する者にとっては、是非一読すべき好文献である。

(調査研究部 高橋 保)